

# 教師を育てる、学校を育てる

## －教育再生を考えるための視点－

研究開発部 矢口みどり

**教育再生への動き**が始まっている。教師の指導力不足、ゆとり教育による学力低下が根本の問題として、教師の指導力認定、授業時間の増加、学力テストの実施、体罰の規定などの方向を政府は打ち出した。しかし、それらが本当の教育の再生につながるのか、多くの人々が不安と疑問を抱いている。それは、それらの対策に「教師を育てる」「学校を育てる」という発想が欠けていると感じるからではないだろうか。

**今確かに**教師たちは一人ひとりの子どもたちに対応しきれていない状況にある。しかし、それは最近になってそうなったというわけではなく、ずっとそうだったのである。そのように育成されてきてはいないからである。教師は生徒一人ひとりをどう指導していくか、ということの本格的には学習してきていない。教科書の内容を定められた時間内に展開するか、その工夫をすることが教育の中心であるとして育てられている。教科の内容についても、理科の例で言えば、小学校の教師たちは、彼ら自身が小学校中学校時代に学習したこと以上のことを学習していない。だから教科書に出ている限りのところの内容を、いかに伝達するかで精一杯。身の回りの問題と学習内容との関係をとらえると、子どもたちの関心が高まることがわかっているにもかかわらず、取り組めない教師が大半である。

**それでも今までは**、地域社会や家庭が要求する環境の中で、子どもたちはそれなりに育てられてきた。しかし、ここ十数年の社会の変化は大きい。インターネット、ゲーム、携帯電話、そうしたものからのすさまじいまでの情報と刺激。核家族少子化、失われた地域の連帯。価値観、労働観、金銭感覚も変わってきている。それに対して教育の側は何も変わっていないのが実情だ。

**さまざまな**社会の課題、技術の変化・・・、それらにどう対応していくべきか、子どもたちは求めている。新しい学力観、ゆとり教育、総合的学習、いろいろな旗が掲げられ指導要領がそのつど変わった。しかし、旗が掲げられただけで、教育の何が変わったのか。教育を担う教師たちに、学習内容について学習指導についてどれほどの研究機会が与えられ支援がなされたか。

**今起きている**教育におけるさまざまな問題は、教科書の内容をいかに伝達するかという教育観で、教育が終始しているというところにこそ問題があるのではないか。今必要なのは、表面に現れた問題にバタバタと対応することではなく、問題の根本がどこにあるのか衆知を集めて科学的に解析し、それに基づいて、教師、学校をどう育てていくかを考えていくことではないか。

JADEC ニュース 71 号 (2007/3) より